

---

# カゲロウ日記

ふうすと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カゲロウ日記

### 【Nコード】

N9438W

### 【作者名】

ふぁうすと

### 【あらすじ】

くの一はエロい。俺の野望はくの一ハーレムを作ることだ！主人公が原作女性陣にちよっかいかける話。アカデミー生から上忍まで狙います。成功するかどうかは知りません。（注意）若干鬼畜成分・エロ成分があります。それらを好まない方はご注意ください。

## 第1話 「くのこヒロい」としよう!」（前書き）

初心者です。最近暇なので書き始めました。よかったら詠んでください。楽しんでいただければ幸いです。

## 第1話 「くのいちヒロインとじよー!」

やあ、みなさんはじめまして

唐突だがここはNARUTOの世界だ

気がついたらこの世界にいたって奴だ

俺？俺はカゲロウっていう忍だ

この世界に来る前のことはもうほとんど覚えてなくてな

忍びとして再出発することになったってわけさ

弱小の里出身だからたいした力も無いがな！

そしてその里も何か黒い服に紅い雲の模様が入った奴に壊滅させられちまったし

逃げ足にだけは絶対の自信があつた俺は死に物狂いで逃げ出して助かったんだ

生き残りは俺1人だけだったようだがな……

まあ里もなくなつたしこれからは自分の欲望に忠実に生きてみようかなってことだ

それはズバリ「ハーレム」だ

ただのハーレムじゃないぞ忍、つまりくのーによるハーレムの建設だ  
幼い頃から戦闘訓練を受けてきた女を屈服させるってのはやっぱり  
いいもんだからな。

幸い、幻術と隠遁術の才はあったからな。あとは俺の生み出したエ  
ロ忍術により・・・  
え？エロ忍術？

そりゃアレだよ。アレ。いやアレっていえばアレだよ。アレのアレ  
をコウしてコウする奴だよ。

「さて。どこへ行くかだな。」

街道の団子やで団子をつまみながら思案を巡らせる。

この忍びの世に存在する5大国

まずはそのどれかに向かうことを目的とすることにした

<水の国・霧隠れの里>

血霧の里と呼ばれた…いやそんなところいたらマツハで殺される予  
感がするんですが

俺の弱さを甘く見るなよ、ろくにクナイも投げられないのだからな！

<風の国・砂隠れの里>

砂漠はいやだなあ・・・それに美人もいなさそうだし

<雷の国・雲隠れの里>

なんだろう暑苦しくてむさいプロレス男がいる予感がする。やめておこう。うん。

<土の国・岩隠れの里>

あの国のことはあんまり分かんないんだよな。うちの里でも遠いからあんまり情報無かつたし。

<火の国・木の葉隠れの里>

やはりここが安牌だな。平和ボケした里だって聞くと、命を狙われるような心配もないだろう。

「よし。まずは火の国へ向かうか」

ポンっとひざをたたいて最後の団子を口に放り込む。

「お客さん。火の国へ行かれるんで？」

団子屋の主人がさきほどの言葉に興味を持ったのか問いかけてくる。

「ああそうだが？」

主人の顔が曇る。こりゃなんかあったな。

「最近は何の国といざこざがあったらしいで、もうすぐ戦争じゃないかって噂なんですよ」

何？初耳だぞ、おかしいな俺の情報網にはそんなのは引っかかって

なかつたんだが。  
木の葉は平和だからってあっち方面にはあんまり飛ばしてなかったからな……

「困ったな」

そんな言葉がつい口を出る。木の葉がダメとなると地理的に近いのは水の国だが……  
あそこはやばいよなあ。島国だからあんまり情報も入ってこないし。逃げるしか脳のない俺にはきついよ……入っただけで死亡フラグがたちそうだ。

「水の国……霧隠れの里か」

その言葉に興味をもったのか主人がさらに食いついてくる。

「お客さん忍者なんですか？」

普通、忍者つてのは里に所属してるからな。任務以外でそうそう出かけないないだろう  
道の往来でくつろいでる忍者なんざ大体、里を抜けた抜け人だろうさ。俺は違うがな。里もうないし。

「水の国っていうとあんまりいい噂は聞きませんねえ」

だよな。そうだよな。あんなところいつたらマツハで蜂の巣だよな。

「あ、でもいい噂もありますぜ」

「水の国は色白の美人が多いですからね。行くんなら一度娼婦でも

抱いてみたらどうですかい」

ほう色白か。いいな。確かに活発に動く美人も良いが色白の美人はこう守ってやりたくなるといふか愛でたくなるといふか。

しかし娼婦か。まああの国は政情も不安定だしいても不思議じゃないな。

火の国じゃありえなそうだが。

・・・よし。決めた。

「親父、俺は水の国に行くことにするよ」

「大丈夫なんですかえ」

心配無用・・・それでも俺は一人の忍び。かつて里を襲った変な目した黒服赤雲のやつから逃げおおせてた実力を持つのだ！

「これでも一応忍びだからな」

「でも他国の忍びが入って大丈夫なんですかい」

ククク・・・俺には秘策があるのだ。

俺は隠遁術には長けている。数多の時間をかけることにより編み出した「影薄めの術」により驚異的な影の薄さを手に入れたのだ！

これさえあれば周りの視線や興味というベクトルを極力かわすことができるのだ。

そしてもともとチャクラもたいして無い俺には一般人に偽装することなど造作もないことよ！

忍びとは耐え忍ぶものの意。何も火吹いたり、風起こしたり、手に雷作ったりしなくてもいいのさ・・・できないだけなんだけどね。

さて日が暮れる前に水の国に入らないとな

「親父く勘定く」

奥にいつていた主人に金を渡す

「兄ちゃんまた食べにきてくださいよ」

「また水の国から帰ってきたら食いにくるよ」

後ろで手をふりながら街道を歩き始める。

さてとりあえずは死なないように頑張りますか。

名前：カゲロウ

年齢：27

出身：故弱小の里

趣味：エロ忍術の開発、セ（ピ・・・）

ストライクゾーン：全盛期イチローがヒットにできるゾーンくらい

容姿：そこらへんにいる若いともいえない微妙な年齢の凡男性

性質変化：風（だけどほとんど使えません）

術：影薄めの術・・・すっごい影が薄くなる。クラスに一人いる机に伏せてるやつよりすっごい薄くなる。メイドカフェの梅酒ぐらい薄くなる。

## 第1話 「くのーにヒロいじとしよう!」 (後書き)

難しいですね2次創作って。初めて書いてみました。文才はないのであしからず。

時間軸とかはあんまり考えてつくってないのでおかしくてもつっこまないでください。

ちなみにカゲロウ君はロリコンです。でも熟女もいけます。美人なら誰でもいけます。

第2話 「・・・」 (原書中)

ヒロイン登場。

## 第2話 「。。。」〇〇〇。よんじゅーよんじゅー」

やってきました水の国、霧隠れの里。

「暗いな」

里の雰囲気、歩く人の顔、そのすべてに陰湿な暗さがへばりついて  
いる。

血霧の里っていうのは冗談じゃなさそうだな。

聞いた話では迫害、粛清なんでもありの里だっつて噂だが。

なんでも忍びになるための最終試験が生徒同士の殺し合いだっつてい  
うんだからどれだけ狂気に満ち溢れてるか分かるな。

まったくうちの里が壊滅したときに巻物全部パクツといてよかった  
ぜ。

情報は最大の武器になるからな。こんな時代場所ならなおさらだ。

「にしても・・・」

色白美人はともかく笑ってる奴すらいねえ・・・みな一様に固い顔  
をしてやがる。

薄汚れた路地には浮浪児らしきガキまでいやがるしな。

「とりあえずは情報収集か」

俺の血の滲むような努力で開発した「影薄めの術」はかなりの効力

を發揮している。

とはいえ人の行き交い自体が少ないな。

この術が発動している状態ならいくら声をあげてもも気付かれることはない。

ただしこの術の効力は俺自信にしかきかないから何かに触れたりするとだめなんだが。

「口寄せの術!!」

戦闘はてんでだめな俺でも補助主体の術ならそれなりに使うことができる。

そして俺が口寄せ契約を結んでいるのは・・・

「ササ……」

煙と共に現れた数匹の蜻蛉。無論戦闘には使えないが情報収集には適任だ。

蜻蛉なら気付かれてもどうってことないしな。

「散!!」

蜻蛉が里の各地へ飛び散る。

最初は蝦蟇とか蛇とか鷹とかかつこいい奴と契約したかったんだけどね〜そう上手くはいかなくてね〜

うちの里に伝わる唯一の口寄せ・・・昆虫。

こんなん使ってるのは俺だけだろうな。

木の葉には虫を使う一族がいるそうだが、俺の蜻蛉は戦闘能力皆無だし。

はたくと死ぬぜ。

いっててへこむな。

「さて、俺も色白美人を探して情報収集だな」

見つかる気がしないけど。

表情も暗くちゃ美人も陰るからな。

「いねえ・・・」

里を見てきたが結局最初の場所へもどってきていた。

素材こそ良好なものもいたがこんな場所で声かけるわけにはいかん  
しな。

術を解けば霧隠れの精鋭たちによって瞬殺されるかもしれん。警戒  
しすぎても損はないだろう。ここはそういう場所だ。

「ねえ・・・」

ん？今誰かに声をかけられた気がしたが、気のせいだな。俺の「影  
薄めの術」が破られることなど・・・

「ねえ・・・おじちゃん」

声は下から聞こえた。ろくに食べてもいないのだろうボサボサの髪にやせ細った腕と足。路地にいた浮浪児だ。

「・・・」

俺は術を解いたわけではない。なぜこのガキは俺を認知できる？

「おじちゃんもボクと一緒に感じがするね。独りぼっちで寂しそう。」

そういう術だからな。この「影薄めの術」は元は単独潜入用だし

「っ!」

カゲロウは目を見開いた。垢にまみれた風貌だが雪のように透き通る白い肌。整った顔立ち。

間違いないこの子供は将来絶世の美女になる。ボクっ娘っても貴重だしな。

そして何よりこの国に来て初めて見た笑顔がこんなに輝くものだとは思わなかった。

「こいつは・・・欲しいな」

まだ幼いが今のうちから光源氏計画つても悪くないだろう。ちょっと青くてもつまみ食いぐらいなら・・・ゲフンゲフン。

「欲しい」という言葉が以外だったのか目をこちらからそらさない少女。

「お前・・・俺と一緒に来る気は無いか？」

一瞬、目を輝かせたがすぐ目を伏せてしまった。

俺は少女の足元にある水溜りが凍り付いているのを見た。

さきほど蜻蛉を飛ばして得た情報だが、この国では血継限界は迫害の対象になっているらしい。

氷・・・おそらく血継限界の一族の能力だろう。

確か水の国には氷を操れる雪一族というのが存在したはず。今となつては絶滅したと聞いていたが・・・その生き残りか

おそらく能力を隠しながら生きてきたか、それとも知らなかったがある日突然知ってしまったか

人間ってというのは自分達とは違うものを嫌うしな。それも特別な力を持つてれば。

だが国にとつては重要な武器の一つ。どちらにしる血継限界は安穏とは程遠い能力だ。争いの種にも矛にもなってしまう。

だが・・・俺には関係ない。

俺にはそんな力などいらなしいしな。まあ大きくなったらボディガードくらいしてもらいたいけど。

「お前が欲しい」

必要なのは血ではない。透き通る肌を持ったこの少女なのだ。美少女は何にも変えがたい宝石なのだからな！

少女は笑顔をみせたかと思うと急にうつむいて必死に2度、3度と首を振る。

ボサボサながらも美しさを失っていないその髪の間から赤くなった白い頬が見える。

「まあ・・・悪くは無いな」

あ、忘れてた。

「一つ言っておくぞ」

少女は顔を上げた。その目は真っ赤にはれている。

「俺はおじちゃんでない。せめてお兄ちゃんと呼びなさい。」

少女は呆気にとられたようだがすぐに満面の笑みを浮かべ

「はいっ！...！」

- 白side -

もう必要とされないと思っていた

僕の中に流れるのは汚れた血。忌諱される血。

存在価値などないものと思っていた。

でも必要とされた

だから僕はこの人についていく

あれってプ、プロポーズってやつだよな

昔、母さんから聞いたことがある

一生愛する相手にという言葉だった

この人が僕を一生愛してくれるなら、僕も一生この人に付き添おう

۲۰۲۰

۲۰۲۰

۲۰۲۰

第2話 「。。。」 (後書き)

ヒロイン登場。一応メインヒロインです。男にしようかと思いましたが女の方が書きやすいので。

第3話 「よんじよとお風呂と追いつ」(前書き)

エロいシーンとか直接的にはかけないですね。機会があれば18禁で書こうかと思えます。

### 第3話 「よんじよとお風呂と追いつ」

「くッ！」

ただいま全力疾走中。  
追ってくるのは霧隠れの追忍部隊。

やはり荷物を一つ抱えて走るのはつらいな。  
精鋭部隊相手じゃすぐに追いつかれちまう。

やっぱりまずかったなー

影薄めの術が聞くのは俺一人。他人といると効力が消えてしまう。  
しかも、怪しい男と浮浪児が里から出ようなんて怪しいもんね、そりゃ怪しむよね。

でもいきなり抹殺しにかかるのはどうかと思うんですけどもねえ！  
後ろから迫る千本とクナイを必死にかわす。少女は抱きつかせているがもともとやせ細った体だ、激しい動きを続ければ耐えられるかどうか分からない。

「数は3人か」

周囲に飛ばしている蜻蛉の視点から情報を視る。

やるしかないか・・・

3対1、隙を見せれば俺のハーレム計画はもろくも崩れ去るだろう。それはだめだ。やっと一人目をゲットしたのに。ちよつとちつちやいけど。

俺に戦闘を行う術なんてない。なんとか時間を稼いで逃げ切るしかないな。

「幻術・右往左往の術！」

説明しよう！この術は人の方向感覚を狂わせることができるのだ。お手軽かつ広範囲にかけることができるとっても便利な術だ。難点はすぐバレることだな。うん。

1分も持たんだろう。多分。

一瞬、追ひ忍たちの動きが止まる。

ほんの数秒、だがそれだけでいい。どのみち正面からやりあっても勝てんのだ。

「秘術・存在秘匿の術！」

これぞ我が最終奥義！チャクラから気配まで一切を遮断することが

できる。

かつて女湯を覗くために朝から晩まで血を滲む努力の末に編み出した奥義よ！

これさえあれば覗きから盗撮までお手の物よ！

温泉街でどっかのエロ覗き親父と共同開発した術なんだけどな。やつのエロに対する情熱も感嘆すべきものがあつたな。

難点はすっごい疲れることだ。もともとチャクラ量の少ない俺がこの術を展開できるのはせいぜい5分が限界。

だがそれだけあればこの場から離脱できる。一般人1人と偽装忍者1人だ往來の中に入れてしまえばこっちのものよ。

突如、気配が消えた俺達に驚いたのかすぐさま警戒態勢に入る追忍集団。

てかこのリーダーっぽい人めっちゃ怖いな  
なんか包帯巻いてでっかい包丁背負ってやがる。殺気ガンガンだし。  
こんなのとやりあってちゃ身が持たんぞ。

勝てない勝負はやらんのでな。さらばだ！

全力でその場から離脱する。追ってくる気配は無い。巻いたな。

「おい、大丈夫か？」

胸元の少女に問いかける。

「……」

あーやっぱ気絶してるか。寝顔もかわいいじゅるっ……ハッ！いかんいかん。

とりあえずどこかで休ませねばならんな。もう水の国からは抜けたし……療養地の温泉街にでもいってみるか。

「よっと……」

気絶した少女をおんぶすると温泉街へ歩みはじめる。

- 温泉街 -

「ほらー目えつぶれよ」

少女の頭から湯をぶっ掛ける。

あんなところにいたんだ髪も肌も垢まみれだぞまったく。

そうそうこの子の名前は白というらしい。透き通る白い肌によく似合った名前だ。

体も少々胸が控えめだが問題ない。将来的に大きくなるとはいえないが

貧乳も巨乳も平等に愛さねばな！

ごっしごっしと白の髪を強引に洗う。

「痛いです・・・」

恥ずかしいのか顔を伏せたまま小声をもらす白。

今の格好は白はなにもつけてないが俺は腕まくりをした状態だ。

？まだ白は小さいから一緒に風呂入れるんです。大きくなっても入りますけど・・・ゲフンゲフン。

こうやって小さい頃から手をつけておけば将来はね

んーまだ青いがあと5年もたてば相当なものになるぞこいつは。

ハーレム作りにはこうした青田買いも重要なのだ。

そついや各里にはアカデミーというのがあったか聞いたことがあるな。

将来有望なくのーに手をつけておくのも悪くは無いな。

里にもぐりこむとなると一筋縄ではいかんだろうが・・・やはり可能性があるとすれば木の葉か。

あそこはけっこう警備も緩いしな。

蜻蛉によれば雲隠れとのいざごさも解決したみたいだし。裏取引でもあったんだろうが。

「カゲロウさん」

これからどうするかを考えていると白が口を開く。

おじさんはやめてくれたがお兄さんとはよんでくれなかった。まあ俺も四捨五入で30だからな。あながちおじさんも間違っただけは無いんだが。

「ありがとうございます」

「・・・」

お礼を言われた。ありがとうございます。その言葉一つにこの少女の生きてきた過酷さが押し込まれた、そしてどれだけの感謝の気持ちがあるのだろうか。

「わっしやわっしや」

なんだか返事をするのが照れくさくなって強めに白の頭を洗う。

「きゃっー」

心配するな。この借りはちゃんと返してもらおうからな。にしても。

その笑顔は反則だっていったらうが・・・っ／／／

### 第3話 「よつじよとお風呂と追い忍」(後書き)

カゲロウ君は攻撃用の忍術をほとんど使いません。クナイも手裏剣もろくに投げられないヘタレです。でも結界忍術・幻術・封印術はなかなかの腕です。活用方向はエロ方面ですが。

#### 第4話 「酔った初心な医療忍者は食べ頃」(前書き)

いっとくけどこの作品の中心は邪心とエロと下心でできています。  
今回のヒロインはシズネです。ちよっと短いかな・・・

#### 第4話 「酔った初心な医療忍者は食べ頃」

夜、街の飲み屋。

白は風呂のあと眠っちまった。まあまだ子供だし今日は疲れただろ  
うからな。

俺も久しぶりに全力疾走したから疲れちまったよ。命がかかってり  
や仕方ないけどさ  
やっぱり霧隠れってのは怖いな。もう二度といかねえぞあんなとこ。

「親父、熱爛くあとそれと枝豆」

「あいよ」

一仕事終えたあとの酒は格別だな。一人寂しく飲むのもいいもんだ  
よ。

「あひひひひ」

てか横の人うるさいな。カウンター席であんまり騒ぐなよ。

「そりゃあね、あの人はいいですよ。自分の好き勝手生きてるん  
ですからあ」

しかもべろんべろんに酔ってんじゃねえか。この酔い方は間違いな  
く酔うとめんどくさいタイプだ。

「ちょっとあなた聞いてるんですか？」

ほらこつち来たよ。貴様は酔ったOLか。

「あの人に連れまわされるせいで貴重な青春も浪費しちゃったしいくもう私24ですよ。ここまで浮いた話の一つもなかったし。このままじゃ綱手様みたいに行き遅れちゃいますよ。あの人は今日も博打でどつちやいつちやいましたし。胸も大きいし私なんか。」

面倒くせえひどく面倒くさいよこの姉ちゃん。でもまあスタイルはよさげだし顔も悪くない性格と胸はアレだがなかなかいい女じゃないか。

酔った勢いで……っていうのも……

「大丈夫だよ。まだ若いって。それにあんた美人だから大丈夫だよ。」

「ほんと！？いやあんたいい男じゃん！いやあこのままだと31歳まで行き遅れるはめになりそうでさあ！」

バシッバシッ

女性とは思えない力で背中を連打してくる。

「ん？」

この感じ……酒によって淀んでいるがチャクラか……？見たところ額当ては付けてないようだが。忍者なのか？

とてもそうは思えんが・・・

「愚痴ぐらいなら聞きますよ？名前はなんていうんですか？」

「私？私はシズネっていうのよ」

「僕はカゲロウっていうんですよ」

こういふ相手は下手にそして紳士にいくべきだな

この姉ちゃんの話だと綱手という女性の付き人をやっつけているいる苦労してると。省略するとそんなところだな。

綱手という確か、木の葉の伝説の三忍の一人だったはず・・・ということとは木の葉の忍びか。

「もうすぐ夜になってきましたしウチの宿で飲みなおしませんか？」

「ふえ？」

.....

やばい。やばいよ。どうすんのよ「ア」。

確かにちよつと酒に溺れて、愚痴聞いてくれた男の人に付いて行っ  
ちやっただけ

男の人の宿に一人でいくつてなにコレ、そういうことなの？

昔から綱手様の付き人ばかりやってたからそういう経験ないし・  
・これってば私に春がきたってこと？

酒屋じゃよつた勢いでokしちゃったけど、歩いてる途中で酔いは  
さめちゃうし。

「シズネさん」

「あひい！」

声をかけただけでひっくり返ったような声をだすシズネ。

さては酔いがさめていまいる状況を把握し始めたな・・・しかし残  
念。ここはもう俺のテリトリーよ！貴様はくもの巣にかかった蝶に  
すぎないのだ！

たわいない会話をしつつ横にいるシズネとの距離を詰める。

こうして見るとシズネの体がよく分かる。酒によって適度にはだけ  
た着物が色っぽさを強調している。着物の間から見える生足が非常  
においしそうである。

「きゃっ」

無言で体重を傾けるとなし崩し的に押し倒す形になる。

息と息が触れ合う距離になるが、シズネはまるでゆでだこのように顔を真っ赤にしている。初心だなくさつき自分でべらべらいったけど。

「あ〜やっぱり綱手様が心配なんで帰ろっかな〜なんて」

目を右往左往させながら言うがどうみてもテンぱっている、かわいいいなコイツ。

「やっぱシズネさんかわいいですね」

「かわっ!」

有無を言わず唇を口で覆うようにぶさぶさ。

「ん〜ん〜!」

手は上から押さえつけている。足をばたばたさせて抵抗してくる。

がそのまま舌で口内を蹂躪する。

「ん?ん!んっ!」

さすがに驚いたのか抵抗が激しくなるが次第にそれも収まっていく。

「ぶはっ」

互いに吐息を吐きながら口が一筋の唾液でつながっている。

はだけた着物からは上気した肌と艶やかな生足が覗いている。

非常にエロい。

シズネの目はとろんとしていてもうカゲロウを拒否する理性など残っていないかった。

そこにはただ男を求める女としての本能があるだけなのだ。

- シズネ side -  
「ん・・・っ」

窓の隙間から差し込む朝日がシズネの意識を覚醒させる。

布団から起き上がると自分が生まれたままの姿でいることに気付くが、部屋に残る昨夜の行為の後が生々しく感じられるのでそのことも気にならなくなった。

反省している。酔った勢いで部屋に連れ込まれそのまま最後までい

つていしまつなどは。  
でも抵抗できなかったのも事実・・・ちょっと気持ちよかったのも事実。

「あひひいいいい」

昨夜の生々しい情事が脳裏によみがえり激しい羞恥心に襲われる。

と同時に少しにやけてしまう。

同世代の人から聞いていたがああいうものだったのね。

そつだ、綱手様に自慢してやろう。

そついえば、綱手様を迎えに行かなきゃ行けないんだつて。  
ふと横の男に目を移す。

「もつすこしくらいいいよね。」

シズネは布団に潜り込んだ。

- 白 side -

朝起きたらカゲロウさんがいなかった。

隣の部屋に行くとカゲロウさんが知らない女の人と寝てた。

なんだろうこの気持ちは。こんな女にカゲロウさんを盗られたくない。

でも僕にはそれに対してどうすることもできない。

僕はまだ子供だから。

でもいつか僕に興味を示してくれるようになったらその時は……

まっけてくださいねカゲロウさん

- カゲロウ side -

朝起きたら白とシズネに抱き疲れてました。

あれ白……なんているの？

#### 第4話 「酔った初心な医療忍者は食べ頃」(後書き)

この時期は原作より少し前です。だからシズネさんもちよっと若い  
です。原作だと30超えてるからね・・・シズネさん。

**第5話 「カゲロウは見た・・・！奴の正体はBBA」 (前書き)**

意外にも人気が出て驚きました。このままエロ路線で突っ走りま  
す。え？ノクターン？大丈夫寸止めだからキスまでだから。

第5話 「カゲロウは見た・・・！奴の正体はBBA」

でその綱手っていう人はどうなんだ。

「綱手様ですか？博打好きで人の言うことは聞かないし、借金取りに追われるしもう大変ですよ〜」

自分の上司をそんな風にいっているのかシズネよ。そしてちょっと離れる。

シズネはカゲロウの右腕に体を絡み付けるように密着させている。歩きにくいぞおい。

そして左側には白がぴったりとくっついていて。握った手を離そうとはしない。

白はシズネとは一切言葉を交わしていない、というか見るからに敵視している。やっぱ昨夜のアレを見られていたんだろうか・・・心配するな白。お前ももう少し育ったらおいしくいたただかせてもらうからな。

「シイイイイズウウウネエエエエ！」

地の底が震えるよな怒気の籠った声が聞こえる。

往来の先に一人の女性が見えた。

金髪、ひきしまった体。そしてなにより豊かな胸！まさに絶世の美女だ。

「つ、綱手様！」

ほうあれがあのだと伝説の三忍と謳われる・・・ん確かもう50近い歳のハズ・・・あの容姿は何かの術で化けてるのか？

つまりB B Aというわけか。なるほどどうりで隠し切れないB B A臭が・・・

「おい！」

人は見かけで判断したらいけないな〜とと思っていると綱手が目の前に来ていた。

「何か今変なこと考えなかっただろうね！」

「いえ・・・ソナコトナイデスヨ」

伝説の三忍なんて化け物とやりあったら俺なんか一瞬もたないぞ・・・デコピン一発で気絶して終了しそうだ。

「それで。昨夜シズネはどこ行ってたんだい。」

「え！？いや、あの。そのね？ははは」

顔を真っ赤にしてあたふたしだすシズネ。なんだかかわいらしい。

「すみません。昨夜は彼女にお酒の席を付き合わせてしまっ

仕方なく助け舟を出してやる。まあ俺の大事なハーレムの一員だからな。

「そんなんですよ。いや〜すみませんでした綱手様。この埋め合わせはちゃんとしますからね?ね?」

必死に機嫌を取るシズネ。そんなにこのBB「あん!?!」姉ちゃんが怖いんだろうな。

「ふん!行くよシズネ!」

「あ〜もう綱手様〜待ってくださいよ〜」

「あ〜おいシズネ。忘れもん。」

駆け出そうとしたシズネを呼び止める。

パタパタと駆け寄ってくるシズネ。

「はい、どうしてんですかカゲロウさっ!?!」

シズネの頭を後ろから手で抱えこんで唇を強引に奪う。

「ん〜!んっ」

はじめはシズネも抵抗を示していたが次第に受け入れてねっとりとしたディープキスへと変わっていく。

唇を離すと名残惜しそうな目をしていたが

「じゃあまたな。シズネ」

ぽかーんと呆けていたシズネだがやっと何を言ったのか理解できたように

「はい。また」

その言葉をおいてシズネは消えた綱手の後を追ってかけていった。

ふと左手に強い力を感じる。白だ。

「カゲロウさん」

白はそういうと爪先立ちして目を瞑って唇を突き出す。ああそういうことね。

ちょっとしゃがんで唇に軽くふれてやるだけのキスをする。

「続きはもう少し大きくなってからな」

そういつて白の頭をなでる。

白は頬を膨らましていたがなでられることで機嫌を良くしたのか怒ってはいないようだ。

「ところでカゲロウさん、次はどこに行くんですか。」

「んーまあ当初の目標どおり木の葉かな。」

団子をつまみながら考える。

ちなみに白は団子というものがはじめてだったようで初めて食べたとき目を輝かせていた。

「旦那、無事だったんですね。」

話しかけてきたのは団子屋の店主だ。まさかの再登場とは驚いた。

「危うく死に掛けたがな。」

もう2度と水の国なんかにはいかん。

「でも旦那達、木の葉に入れるんですかい？身分照会とかいるんじ

や・・・」

「その点は心配ない！」

実は先日木の葉の忍びと知り合いになつてな。一筆書いてもらったのだ。

シズネGJ。あいつは木の葉の上忍だそうだからな。ピロートークで頼み込んだら書いてくれた。

内容は「この人大丈夫だから。木の葉で暮らさせてやって」的な事を。

「それならもんだいはありやせんね・・・というか旦那いったいどこでそんな人と知り合うんですかい」

「あれだよ俺のためまぬ人望と天運のおかげだな」

白、そんな目で俺を見るんじゃない。団子もう一皿追加してあげるから。

もしものときは幻術とか影薄めの術とかで侵入しようと思つてたんだけどね。

安全なのにこしたことはあるまい。

「いくぞ白。今日中に火の国へ入らないとな」

「もが・・・はい！」

そして木の葉では俺には秘策がある・・・待っているよ木の葉のく  
のー！

第5話 「カゲロウは見た・・・！奴の正体はBBA」(後書き)

シズネはかわいいんだよ！次は木の葉です。さあ誰から襲いましょうか(笑) カゲロウ君の標的となるキャラ募集中です。

第6話 「教師って結構HENTAI多いと思うよ」(前書き)

次のエロ回まではちょっと時間がかかります。

第6話 「教師って結構HENTAI多いと思うよ」

「うむ」

「どういたしますか火影様」

ここは火の国、木の葉の里の頂点に立つ火影の部屋である。

三代目火影。忍びの頂点に立つ彼が悩んでいるのはさきほどやってきた放浪者らしき2人組みだ。

少女と男、親子に見えなくもないが・・・にしは男は少し若いというのが門番の印象だ。

「どんな素性があるやもしれんし、今あの2人は。」

側近に対して様子を聞く三代目。無論、暗部を使って2人を監視させている。

「火影様！」

「どうしたライドウ！」

駆け込んできた男の名前は並足ライドウ、木の葉の特別上忍である。その手には一通の手紙が握られていた。

ペラッ

「ふむうううう」

その手紙を読む三代目のしわがますます深くなる。

「ふう……」

「いったい何がかかれていたんですか？」

パイプから出てくる紫煙を吐き出す火影。

「綱手じゃよ。まったく里をでて行ってどこをふらふらしているのやら……あの男は大丈夫だから職でも紹介してやれということじゃ」

少しの間考え込んだあと

「あの男、カゲロウといったか。ここに呼べ。」

-----

すげえなこのじいさんが忍びの頂点とよばれる火影か。

「ということじゃ。木の葉はお主がここで住むことを認める。」

さすがはシズネ、上手く書いてくれたらしいな。さすがに木の葉も伝説の三忍からの推薦状があれば認めざるを得まい……書いたのはシズネだけだな！

しかも三代目は綱手の師匠らしいからな弟子には甘そうな人だしま  
ず大丈夫だろう。」

「おぬしは忍びと聞いておる。これからは木の葉のために働いても  
らうがよいか？」

お、来たな。

「実はそれについてお願いが・・・」

「カゲロウさん大丈夫かな。」

先ほど木の葉の上忍に火影に面会させてもらいにつてからまだ帰っ  
てこない

あの人のことだから大丈夫だとは思っけど。

にしても木の葉の里っていうのは霧隠れとはぜんぜん違っんだなあ。  
みんな明るいいし。

「お前、こんなところで何してらっばよ。」

手持ち無沙汰で里の様子を眺めていると、一人の少年が話しかけて  
きた。

僕より3歳ばかり小さいくらいの男の子だ。

「見ない顔だけだ」

「ええ、今日、木の葉にやってきたんですよ。君は……？」

「俺？俺の名前はうずまきナルト！将来、火影になる男だつてばよ！」

ああ、この里は平和だななんて思ってしまった。

「そうですか、頑張ってくださいね。」

思わず笑顔が出てしまう。僕がいたところじゃこんな会話なんて一生できなかつただろう。あそこから連れ出してくれたカゲロウさんは僕にとっては神様以上の人だ。

少年を見ると固まっていた。何か変なことだったかな？

「な、なんでもないつてばよ。姉ちゃんも頑張るつてばよ」

顔を赤くして走ってさっさとしまった。いったいどうしたんだろう。

ガチャ

話が終わったのだらう扉が開いてカゲロウさんが出てくる。

「白行くぞ」

僕が先ほど走り去った男の子のほうを向いていると

「白どうかしたのか？まさかなんかされたんじゃないだろうな。」

「いや、さつき男の子が・・・」

すると過敏に反応したカゲロウさんが

「何？男、そうか俺の白に手を出そうとはいい度胸だ・・・我が秘術で一生心から消えぬトラウマを刻み付けてくれるわ！！」

「大丈夫ですから！大丈夫ですから！」

この人なら本当にやりかねない。

でもそんなことしなくても僕はカゲロウさんから離れるつもりはありませんから安心してくださいね。

カゲロウさんはアパートの一室らしきところをを借りてくれた。

私には家事全般を任せてくれるそうだ。なにかあったときには周りにいる蜻蛉に伝えれば伝わるそうです。

「アカデミー？」

夕食時、カゲロウさんからそんな言葉が出てくる。  
ちなみに夕食はカゲロウさんが作りました。私も早く作れるようになります・・・

「そつだ。白、お前にはアカデミーに入ってもらつてもらう。忍者要請の学校だ。お前のその力は望む望まないにせよ関わってくるだろう。血継限界を制御するため、まあ鍛えといて損はないさ。」

こいつ才能ありそつだしな。将来守ってもらわないと。俺を。

「カゲロウさんは？」

「俺は火影から紹介された仕事をやる。」

白がとたんに不安気な顔をする。

「心配するな危険な仕事じゃないよ。」

ジジ・・ツツ

食卓に数匹の蜻蛉が飛んでくる。この里の細部まで多くの蜻蛉を放つておいた。情報は命だからな、何事も知っておくべきだ。

(やはり見張られているか)

いくら紹介状があつたとはいえ部外者をそつ簡単には信用しはしないか・・・老いてもさすがに火影だな。

見張りは暗部が3人、こりや当分派手な動きはできないな。

口惜しいが見張りがはずれるまでは大人しくしとくか。

「みんなー静かにしろー」

ざわついていた教室がこの先生、確かイルカ先生だったと思う。この先生の声で静まる。

「今日からこのクラスに入ることになりました。白です。よろしく  
お願いします。」

笑顔でおじぎをする。

女子からはわーっという声、男子はなぜか一様にこちらを見ていない。しかもみな心なしか顔が赤い。僕はカゲロウさん以外の男の人には好かれないんだろうか。あ、昨日の男の子もいる。

じゃあ「白さん、君はあの席に座って。」

「よろしく！あたしは春野サクラ！ねえ白さんキレイだよねえ」

「ちょっとサクラ、何先に話しかけてんのよ！あ、あたしは山中国。実家は花屋やってるんだ。」

右と左から同世代くらいの子がすごい勢いで話しかけてくる。今までこういう経験なかったからどうい話したらいいか分からないや・・・とりあえず笑っておこう。

「おーい、春野、山中！まだ話は終わってないぞー」

騒いでいるとイルカ先生が静かにするようにと怒る。

「次はこれから新たにお前らを指導していただく先生をご紹介します。ではこちらへ。」

その人は壇上に立つと

「えーこれから幻術、封印術、結界忍術などを担当させていただきます。カゲロウといます。どうぞよろしく。」

白は一瞬我が目を疑った。カゲロウさんが教師？あの人か？

クククこれこそ究極の青田買い！

忍者候補のうちから手をつけておく作戦よ。難点は時間がかかることか・・・こいつらが忍者になるころには俺もう30超えちまうよ。まあそれまでは中忍や上忍の女性陣を狙うとしますか。

しかし暗部に見張られてるから今すぐには動けそうに無いな

- 夕方の一幕 -

夕飯の買い物中。

「まあご兄妹ですか？」

「いえ、嫁です。」

ざわっ・・・

「ポッ・・・」

（ロリコンだ・・・）

（ロリコンだけありや）

（ロリコンだな）

第6話 「教師って結構HENTAI多いと思うよ」(後書き)

内部時間は早めに経ってます。みんな原作の年齢まで進めたいので。ちなみにカゲロウ君はカカシやイルカより年上です。主人公オッサンなんだよな・・・見た目は結構若そうだから大丈夫。

第7話 「アカデミー名簿・男編」(前書き)

今回のメインは・・・男・・・だと・・・

第7話 「アカデミー名簿・男編」

ふむ。

アカデミーの教師になるといったとき驚かれていたが、まあ最低限の忍術と体術は使えるからな。幻術ならお手の物だし。

「イルカ先生、これからよろしく願います。」

ちなみに紳士モードだ。さすがに職場で本性全開にするわけにもいかまい。クビになっちまう。

でもあれだぞ。術を使って女の子の着替えシーンを覗いたりとか、視姦しようと思ってたりなんか思って・・・ゲフンゲフン。

「いや、こちらのほうが年下なんですし、こちらからもよろしく願います。」

「イルカ先生！とそちらは？」

通りがかったもう一人の教員らしい男が話しかけてくる。

銀髪？つばいイケメンだ。

「カゲロウ先生、彼はミズキ先生です。」

どうぞよろしくと握手してきたので適当に返す。

ん？なんかこいつ怪しいな、こういうヘラヘラした奴に限って裏では口クなことやってなかったりするんだよな。  
え？なんでわかるかって？俺もその類だし・・・

俺がアカデミーに就職したのは蕾の選別と情報収集。あとは白に付く虫の排除だな。

あいつ自分が美人なのわかってないからな

「うずまきナルト」

まずうちのクラスの連中を調べていくか。  
名簿と前もって渡された生徒の成績表を見ていく。

えーとまずは

「うずまきナルト」

問題児。

そんだけかい。まあ飛ばした蜻蛉で情報は入ってるんだけどな。  
かつて里を襲った九尾の人柱力。それで迫害を受けてると。無理も無いか。

アカデミーでも落ちこぼれよばわりされてたしな。

むしろ迫害を受けないほうが不思議だな。

しかしあれだけの仕打ちを受けてもまだ歪んでないのはすごいな。  
男に興味はないんだけどなくあの姿はうちの白を思い出しちまうか  
ら放つとくと気になっちまうしな

当の本人は・・ブランコで一人ぼっちか。

「おいコラ、クソガキ。」

いきなりナルトの背中を蹴飛ばす。

「おわああああああ」

悲鳴を上げて顔面から地面にダイブするナルト。

「何するんだってばよ！え・・・えつと新任のカゲロウ・・・先生  
？」

意外な人物だったのか思わず固まったようだ。

おそらく自分に積極的に関わってくる者さえ少なかったのだろう。  
かなり驚いている。

「お前なんであんなに失敗ばかりすんだコラ」

こちらの言葉にムツと来たのか言い返してくる

「俺だって好きで失敗して「だから修行つけてやる。」

「えっ!？」

「俺は部外者だ。この里の人間じゃない。お前にどういふ事情があるつと関係ない。落ちこぼれがいるならそいつを救済するのが教師の役目だからな。」

呆けた顔でこちらを見上げたままナルトは動かない。

「おいコラ、やんのかやらんのかどつちだ。」

「やる!やるってばよ!」

「で何を教えてくれるんだってばよ!やっぱ先生の得意な幻」いやお前幻術の才能ないから。」

「お前に必要なのはコントロールだ。」

「コントロール?」

「いいかナルト。お前の長所はアホほどあるチャクラ量だ。」

それをきいて気をよくしたのだろう。

「でへへ。俺ってば才能あるってこと?」

「阿呆。容量があっても出力が滅茶苦茶じゃ使い物にならんだろうが。だから出力をコントロールする練習をするんだ。」

「いいか手を使わずに足にチャクラを吸着させて木登りしろ。天辺

までいったらもう大丈夫だ。じゃあ俺は夕飯があるから。」

「え？見ててくれないの？」

意外そうな目で俺を見るナルト。

「なんで俺ができるまで見てなきゃならんのだ」

といつて足早に立ち去る。後ろで何かいつてるが知らん。

- 夜 -

さきほどの場についてみると案の定つぶれたナルトが転がっていた。俺が来たことに気付いたのかへとへとながらも声を出すナルト。

「ぜ・・・ぜんぜんだめだつてば・・・」

そりゃ卒業までにできりゃ語の字な修行だからな。

「まあ毎日続けてりゃマシになるぞ。」

「おい、起きろ」

転がってるナルトを蹴り起こす。

「先生・・・外道だつてばよ・・・」なんかつたか？「なんでもないです。」

まあ飯ぐらいおごつてやるか。ここに来る途中に写楽だか百楽だか

いうラーメン屋があったな。そこでいいか。

「飯食いに行くぞ。」

「え？本当！ラッキー！」

お前さつきまで潰れてたんじゃないんかい。さすがのスタミナだ。チャクラ量が俺の50倍くらいあるに違いない。てか多分あるだろうコイツ。

「おっちゃん替え玉追グヘッ」

人の金でおかわりしようとしてんじゃねえよ。

ナルトの顔をテーブルへ叩きつける。カエルが潰れたような声と音がしたが気のせいだな。

あっクソ、この馬鹿のびてやがる。まったく・・・置いて帰るか。

「ん・・・？」

ナルトが目を覚ますとそこはいつもと違う天井だった。

「あ、目が覚めましたか。カゲロウさん、ナルト君が目を覚ましませんでしたよ。」



うちは一族の末裔と。写輪眼か〜いいな〜そんな目。俺も欲しいな。  
で成績優秀。モテモテと。

ふむ。こいつは我がハーレムの敵になるかもしれん。注意が必要だな。

〜奈良シカマル〜

ふむこいつはどっかの里の風使いとフラグが立ちそうな気がする。  
そんなフラグは俺が木っ端微塵に折るけどな。

〜秋道チヨウジ〜

デブ。以上。

〜犬塚キバ〜

俺、猫派。

〜油女シノ〜

こんな奴いたっけな・・・

- 今日のカゲロウ家 -

「ねえ、カゲロウさん。」

「なんだ？」

「今日、更衣室に見知った気配があったんですけど気のせいでしょうか。」

馬鹿な・・・っ。ハッ！そういえば確か白は俺の影薄めの術が効かなかった・・・

「次はないですよ。」

おのれ・・・俺の憩いの場が！

「ごめんなさい・・・」

白の後ろから立ち上る怒気の前に30手前の男は謝るしかなかった。

だが白よ甘いな・・・俺には蜻蛉をいう便利な覗きグッズが！

「カゲロウさん？蜻蛉飛ばしたって分かりますよ？」

「ハイ・・・」

第7話 「アカデミー名簿・男編」 (後書き)

原作にちよつかいは出すけど積極的な介入とかはしません。カゲロウ君が興味あるのは女の子だけです。

次回からはちゃんと女の子だしますので大丈夫です。

第8話 「無口っ娘はリアルだと結構大変」(前書き)

今回のヒロインはヒナタちゃん。まだ食べないですけどね。

## 第8話 「無口っ娘はリアルだと結構大変」

唐突だが今俺はアカデミーの女子更衣室にいる。大丈夫、今日は白は別班行動だ、ここにはいない。

ふむ。マーベラスな眺めだ。いや若いっていいねえ。画面の外の大きなお友達は真似してはいけないぞ。死ぬから。社会的に。

く春野サクラく

「んなわけないでしょ！何いってんのよ！」

下着はピンクのようだ。胸は・・・将来に希望は持てるかどうかは微妙だな。

うちはサスケに惚れてると。なんか面倒くさそうな性格してるな。思春期の女の子ってのはこんなもんならうか。

将来ろくでもない男に惚れて周りに迷惑かけたあげく最悪の展開にもっていきそうな気がする。気がするだけだけどな。

く山中いのく

「ちょっとくサクラくまた太ったんじゃないのく」

下着は黄色。髪型はポニテか、グッドだ。

でこいつもうちはサスケに惚れてると。学校なんていう狭い枠の中では運動ができる奴がモテるしな。

体のラインは際立ったものがあるな。もう少し体の露出を増やして・・・ゲフンゲフン。

日向ヒナタ

「・・・」

うつむきがちで暗い性格だが素材は一級品だ。名家、日向一族の嫡子か。ちなみに下着は白、これは襲いたくなるそしていじめたくなる。

だが才能がなく、父親に見捨てられていると・・・これは使えるかもしれないな。

そして将来に期待ができそうだが。適度に肉がついていても結構おいしいしな。

このクラスで有望そうなのはこんなところか。やはりそうそういいいな。しかもまだみんな子供だし。他？ブスは知らん。

「ん？」

日向ヒナタがこちらを見ている。何故だ。俺の術はそうそう見破れるものでは・・・

え？何？あの目。あれが日向一族に伝わるといふ血継限界。

「白眼！...」

なんでお前そんなもんこんなところで発動してんだ！やばいよ、見えてるよ。俺見えちゃってるよ。  
そついや白眼つて下着とか裸も透視できるのかな。うらやましい・・・  
・じゃないよ現在進行形でピンチだよ。

どうする？

逃げる

脅す

やっちやえ

逃げる

脅す

やっちやえ

むっ！女子達が移動を始めるな。チャンス！

（結界忍術・遮断方陣！）

内部と外部を遮断します。音も遮断します。外から見ると結界自体が見えません。青には最適の術です。でも触れると認知できます。青が分からない人はお母さんに聞きましょう。殴られます。

「えっ？」

影薄めを解くと、結界内で音を立てても外部には漏れないことをいいことにヒナタとの距離を詰める。

いきなり急接近されたことに驚いたのか涙目で体をがたがた揺らす。体を縮めている様はまさしく小動物だ。くそっかわいい・・・

「いいか、放課後。教室で待ってる。いいな。」

コクツコクツと夢中で首を振るヒナタを確認した後、術を解いてその場から速攻で立ち去る。

(さすがにやるのは無理があるな・・・)

- 放課後 -

「お前は何も見なかった。」

「えっ・・・」

いちいち反応がめんどくさいなこの子は。自分が出せないのが悩みと聞いていたがこれは重症だぞ。でもそのおかげで命拾いしたわけだが。

「だから下向くなって。」

指をヒナタのあごに差し込んで上を向かせる。思わず顔が近くなる。

「あ……っ……あの……っっ」

もうしどろもどろだな。あー小動物だ。子猫みたいな反応だな。この子家で飼いたいな。

「あーもう下向くなってせっかく美人な顔立ちしてんだから損だろ  
うが。」

「び……!!」

ヒナタは顔を真っ赤にしたあとプシューという音とともに意識を飛ばして床に倒れた。

いやいくらなんでもないだろうそれは。恥ずかしがりやにも限度つてもものがあるでしょうに。

「ん……っ」

ヒナタが目を覚ますとそこは星空の下だった。

(じじは……?)

そこはアカデミーからさほど離れていない公園のベンチだった。

(あつ先生……)

どうやら私は先生にベンチに寝かされていたようだ。いわゆる膝枕状態だ。

恥ずかしい……。

「ん？ああ起きたのか、ってもうこんな時間か。」

「あつ……。」

(忘れてた、今日父さまと組み手の修行するっていわれてたんだ……  
・どうしよう……もうとっくに門限すぎちゃってるよ……)

「どうした。そんなに青ざめて。」

ふーん、さすがに名家ともなると大変なんだな。でも確か才能が無いって言われてたらしいな。妹の方が才能があるとかって。

まあ俺のハーレム候補だ。助けてやるか。

覗きを見逃してもらった借りもあるしな。

「すみませーん。ヒナタちゃんのお宅ですかー！」

(先生、声大きいよ。恥ずかしい・・・)

「どなたですか？」

おお。この人が日向当主の日向ヒアシか・・・苦手なタイプな  
こういう堅物系は。

「いやあヒナタちゃんを夜遅くまで付き合わせてしまいましたすい  
ません。」

「いえ・・・。」

こちらをいぶかしむような目で見つめるヒアシ。なんで白眼になっ  
てるですか。怖いんですけども。

「実はヒナタちゃんに幻術の才能があることが分かりまして。力を  
入れて鍛えたいと思ってるんですが。どうでしょう家に預けてもら  
えませんか？」

(ええええ！何それ私聞いてないよ先生！第一そんないいわけじゃ  
父様は・・・)

「・・・いいでしょう。」

(嘘お！やっぱり父親は私を見捨ててるんだらうか。ハナビの方が  
才能あるって周りの人もいつてるし。)

「おいヒナタ」

「はっはい」

ウサギが飛び跳ねるように肩を震わせるヒナタ。

「ということでお前は家で預かることになったから。ちょっと狭いけど我慢しろよ。」

(・・・どうしよう・・・どうしよう)

「ただいま」

「お邪魔・・・します」

せまいアパートの一室のドアを開くとそこには一人の少女がいた。

(あれ？この人、確かアカデミーに入ってきた白さん・・・？)

「あー白、夕飯一人分増やしてくれ。」

「また誰か連れ帰ってきたんですか？」

台所に立つ白さんはまるで奥さんみたいだ。

(いいなあ・・・ハッ私は何を・・・)

「ヒナタさんどうぞ上がってください、汚いところですが。」

家とはいろいろと違う狭いし・・・確かにちよつと汚い。

夕飯は白さんお手製のシチューだった。白さん料理上手いなあ憧れちやうよ。私あんなに器用じゃないし。

「というわけで今日からヒナタを家で面倒見ることになった。」

頭を抱える白さん。

「僕に相談もなく・・・分かりました。・・・せつかく2人だけの場所だったのに。」

「なんか言っただか白？」

「いいえ。何も。」

白さん怒ってるんじゃないかな・・・

「すみません狭くて、雑魚寝みたいになっちゃいます。」

その日、私は結局寝られなかった。

だってすぐ横に男の人がいるし・・・

(ハーレム要因ゲットオオオ)

(カゲロウさんは渡しませんよヒナタさん?)

(恥ずかしい・・・)

- 今日のカゲロウ家 -

「そついえば放課後、ここに来る前ヒナタさんと何してたんですか。」

「え!?!」

「まさか・・・」

「いや大丈夫!まだ襲ってないから。」

「・・・まだ？」

「あっ」

第8話 「無口っ娘はリアルだと結構大変」(後書き)

ヒナタはすごいかわいいと思うよ。というわけでヒナタを確保。  
ア  
パートの一室で美少女2人と同居・・・knegg?

第9話 「蜻蛉とみたらし団子」(前書き)

次のヒロインはアンコだよ。私はかなり好きなキャラです。

## 第9話 「蜻蛉とみたらし団子」

次のターゲットが決まった。

アカデミー？いやいくらなんでも小さいって、あと5年ぐらいしたら早熟だけど出来のいい木の実がなりそうだしな。

今のうちに摘んでしまうのはもったいない。今は種と肥料をまいとかなないと。

で次のターゲットだが木の葉の特別上忍「みたらしアンコ」だ。

なんでも変態で有名な大蛇丸の唯一の弟子らしい。この大蛇丸という男、相当な変態のようだ。俺とは違うベクトルで。

でこの大蛇丸が大罪を犯して里を抜けたと。それでこの女は大蛇丸のことをまだ追っているようだ。

しかし危険分子の弟子ということで暗部などからもマークされている。と。

師匠が変態だったのは不運としかいいようがないな。そしてその師匠は俺の天敵のような気がする。なんだろう。性的な意味で。

胸はまあまあ、性格はキツそうだがそこがいい。抵抗できない状況で乗りつくしてやるぜ！フハハハハハハ！

おっといかにいかに。これじゃまるで俺が外道のように見えてしまっていないか。

作戦だが・・・

まず近くの会話が聞こえる程度の距離に近づき、そして大蛇丸の情報を知っていると、このことを会話に混ぜればいい。あとはあちらから接触を図ってくるだろう。

でやってきたのが甘味屋。

なんでもみたらしアンコは超甘党という情報だ、主食が団子とお汁粉・・・どうやってあの体型を維持してるんだ？

「団子50本持つてきなさい。あとお汁粉ね。」

なんちゅう注文だ

「カゲロウさん。注文ですよ。」

あ、こっちも注文か、アンコとは敷居を隔てた、耳をすませば会話が聞こえる位置に座っている。

「白、お前適当に頼んどけ。」

その言葉を聞いて喜々として注文する白・・・太るなよ。

「そっぴや白、知ってるか？」

「何ですか？」

「木の葉には三忍っていうのがいるらしいんだ。自来也・綱手・大蛇丸っていうのが。」

「ほえ〜ほうなんですか。」

食べ物口に入れながら話すのはやめなさい。白。

「でその中の大蛇丸っていう奴の情報を掴んでな。」

ガタツ

あ、釣れた。

敷居の向こう側で思わず立ち上がったかのような物音がした。

「白、お前先に帰ってヒナタの手伝いしてな。」

あの子はドジっ娘の匂いがする。食材と間違っ指切るタイプだよアレ。

「分かりました。」

白は席をたっ店を出る。

さすがに人前では何も仕掛けてこないか・・・

その後わざと暗めの路地へ入り込む。無論、後ろからアンコが尾行してきてるのは承知の上だ。

ちなみに今の俺の格好はそこらへんにいる一般人の格好だ。俺の顔などそこまで広がってはいまい。

突如右肩を掴まれたかと思うとそのまま壁に叩きつけられる。

「声を出さないことね。」

後ろ首にはクナイ。

「大蛇丸の情報を吐いてもらっわよ。」

今の状況はアンコに壁に押し付けられている状態だ。無論、体も密着している。思ったより胸があるな・・・  
体をずらしてアンコと正対するような格好になる。まだクナイは首元に密着したままだ。

「誰かと思ったら木の葉の特別上忍のみたらしアンコさんじゃないですか。」

顔を見ただけで名前を当てられたのが意外だったのか驚いた顔をす  
る。

「へえ、あたしの顔知ってるんだ。」

「木の葉の忍者がこんなことしていいんですか？」

「もし噂でも立てばあんたが明日の朝をおがめなくなるだけよ。」

殺る気満々だな。しかしまだこれほど大蛇丸に執着しているとは・  
・思ったより慕っていたのかもしれないな。  
そんな師匠が自分を捨てて里を抜けた、か。

にしても即行動に移してくるとは情報どおり大胆というか率直というか。  
うか。

「情報つてのは等価交換なものじゃないんですかね。」

あくまで強気にでる。

「あら。尋問って言葉を知らないのかしら？」

互いの吐息が感じられる距離まで顔を近づけて脅しをかけてくる。

「へーえ、じゃあ対等な立場なら取引に応じてくれるんですか。」

視線をずらさず。数センチ先にあるアノコの目を見つめながら話す。

「まあね」

ここで仕込んでいた仕込みを打つ。

じゃあ対等な立場つてのは

「「「こつという状況ですか？」」」

ポフン！と音をたててクナイが突き立てられていたカゲロウが消える。

「影分身!？」

捕まっていたのは影分身。本体は近くで影薄めで隠れていたわけだ。どっからどうみても忍者に見えないさえない男が影分身なんか使ってたらしりゃ驚く。

判断が遅れたアンコのクナイをはじき落とし手をひねって壁に叩きつける。

術を使われたら厄介だからな。というか不意を付かないと勝ち目が無い……

首筋にアザ? いやこれは……呪印か? また悪趣味なものを。

「これで取引に応じてくれますよね? アンコさん」

「つく!」

その悔しがる表情もまたグッドだな。

「団子30本。あとおしるし。」

「黒酢あんみつ。」

ということできっさきの甘味屋。

「お前まだ入るのかよ。」

「甘いものは別腹よ。」

さいですか。

「で、何で大蛇丸の情報が欲しいんだ？」

運ばれてきたあんみつを食べながらアッコに問いかける。

「あなたには関係の無いことよ。」

「じゃあ取引だ。俺はお前に情報を渡す。お前は俺の要求を呑む。」

「で、その要求ってのは？」

団子を食べながら投げやりに答えるアッコ。

どこにはいつてるんだその量。

「俺の女にな」やだ。」

即答ですか。

「よく考えたらあんたみたいなのが本当に大蛇丸の情報持ってるのか怪しいもんよ？」

「大蛇丸は現在、各国にアジトを持ち移動していたが。今はある国に腰を落ち着けている。その国の大名に取り入っているいろいろやってるらしい。」

アッコは本当に有益な情報がもらえるとは思っても見なかったのか心底驚いた顔、そして一瞬歓喜とも憎悪ともとれるような表情をした後

「へへえ、本当に知ってたのね。」

蜻蛉の情報収集力を舐めるな。物量作戦だけどな！さすがに他国まで飛ばすのは骨が折れる・・・

アンコはしばらく考えこんだあと

「いいわよ。条件を飲んでも。」

意外だな、もつと粘るかと思ってたんだが。そんなカゲロウの顔を見たのか、

「へえ、あたしじゃ不満？」

ひじをついて挑発的な態度とポーズをするアンコ。

際立ったプロポーションと整った顔立ちからそれは非常に妖艶にも見える。

「いや大歓迎さ。ところであともう2つ頼みがあるのだが。」

「さすがにこれ以上は飲めないわよ。あつ団子もう10本追加で。」

「いやこれはあんたにも有益なことだ。あんたの呪印をいじってみたいんだが。」

アンコは首筋に手を当てる。忘れてたくても忘れられないかつての師への繋がりがあるかぎりアンコの心は大蛇丸に縛られ続けるのかもしれない。

「だけど三代目にも解けなかったのよ？あなたに何が出来るのよ？」

「一応専門家だからな、大体俺の女にそんな気持ちの悪いもんつけられてちや胸糞悪い。」

「へえ・・・じゃあ頼んだわよ！」

背中を叩いて店を出て行くアンコ。

フフフ・・・貴様はもうすでに罠にはまっているッ！今夜を楽しみにしておくがいいわ！

「あ、お客さん。お勘定！さっきの人の分のも！」

あんの女・・・

第9話 「蜻蛉とみたらし団子」(後書き)

原作じゃ出番がいまいちないアッコさん。おかげで口調とキャラがいまいち分からなかったり・・・。

第10話 「みたらし団子のタレは甘かった」 (前書き)

決していやらしいことをしているわけではありません。決していやらしいことをしているわけではありません。大事なことなので2  
ry

第10話 「みたらし団子のタレは甘かった」

「はいどちらさまで・・・ちょっとあんた今何時だと思ってんのよ。」

その後、夜、アンコ宅（ウチの蜻蛉達は優秀なんです）

「約束どおり、呪印取りに来たぞ。」

ぶつちやけ家上がるための口実だけだね。

「あつちよつと勝手に上がらないでよ！」

知らん。

うわ〜これが一人暮らしの女の部屋か。生活観丸出しというかガサツというか・・・

「殺すわよ?」

すまん。

「よーしじゃあ呪印とるぞ。」

「んな簡単に取りれるもんじゃないでしょ。」

うんそりゃね。ダメでもとみな感はある。

「じゃあ脱げ。」

「ハッ？」

なんだその犯罪者を見るような蔑んだ目は心外だぞ！

「呪印調べるのに服が邪魔なんだよ。上半身脱げ。俺が脱がしてやつても良いぞ。」

「・・・分かったわよ。だからそのいやらしい手の動きをやめなさい。」

しぶしぶ了承したのか脱ぎ始めるアンコ。

肌を見せる服を着てなかった分、脱ぐとコレはなかなか・・・  
美女の生脱ぎストリップか・・・眼福眼福。

肌もきれいだし、胸もうっんグッドだ。

「これでいいでしょ。」

「胸隠さなくていいのに。」

「殴るわよ。」

「すまん。」

「この呪印は大蛇丸か？」

「知ってたの？私の経歴。」

「まあな」

封印がかけられてる。三代目の封印か。  
にしても悪趣味なもん作るな。呪印なんて。

経絡系に絡んで感情をトリガーにしてチャクラに影響を及ぼすタイプの呪印だな。

おそらくもともになったものがあるんだろうがそんなものは分からんしな。

いずれにしろこんなものを普通の人間が使ってたら体に負担がかかりすぎる。寿命を削っているようなもんだぞ。

「この呪印。使っていないだろうな。」

「ええ。」

使ってたらどんな副作用があるかわからん、どちらにしるロクなものじゃないだろう。

まったくここまで経絡系に癒着しているとは・・・神経にへばりついているようなもんだぞ、こりゃ難しいな。しかも気持ちの悪いチャクラもありやがるこりゃアソコのじゃない大蛇丸のだな。

どんだけ変態な術開発してんだ・・・まあ人のことはいえんか。

だが・・・まあものは試しか。

「痛むぞ？」

アンコに念のため声をかけておく。

「つつー！」

5指にチャクラを集中させ呪印をはずしにかかる。経絡系に引っ付いてる大蛇丸のチャクラを少しづつ剥離していく。神経を直にいじくるようなもんだ。多分相当痛みが来るはず・・・

「つ・・・あ・・・ん・・・んん！！！」

気のせいかなンコの声が艶やかに聞こえる。俺のドS心が働いてるせいだろうか。

「大丈夫か？」

とはいえさすがに堪えると思うので心配してやる。

「ハア・・・っん大丈夫よ・・・続けなさい。」

頬が上気して息が荒い。すごい興奮する。俺が。今すぐ襲いたい感情に狩られるがそこはぐつと我慢して指先に集中する。

「あつ・・・う・・・んっ！！ああ・・・」

アンコの肩が震える。首筋と背中に汗もかいてきている。うなじがものすごいエロい。

「つくう！・・・んっ！あっ・・・！」

よし大分はがれてきたな。

「平気か？」

「だ・・・大丈夫・・・ハア・・・ハア・・・ん！え・・・？」

手を握ってやる。

「ほら大丈夫だから。手え握ってやるからもう少し頑張れ。」

返答はなかったが、目を合わせず手を握ってくる。恥ずかしいのか。上気している顔からは読み取ることが出来ない。

握った左手に力が入る。

「やっ・・・っ！・・・んん！」

ぎゅっ

「あ・・・ああ・・・っ！」

ブチッ！

剥がれた！

「この気持ち悪いチャクラが・・・人の女にくっついてんじゃねえよっ」

握りつぶすとアンコにくっついていたチャクラは霧散した。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

肩で息をしているアンコの首筋にあの呪印はもうない。やればできるもんだな俺。

ふらっ

体力を消耗したのだろう。ふらつくアンコの体を支える。そのままベッドに寝かせてやる。

俺も疲れた・・・あんな高等術はチャクラ量の少ない俺には拷問だ・

- 朝 -

目が覚めるとベッドに寝かされていた。上半身は何もつけてない。裸だ。

昨日のことを思い出し、なんともいえない気分になる。思わず首筋に手を置く。かつての師との繋がりはそこには無い。

(ん?)

床に一人の男が転がっているのを見つけた。なんでお前までここで寝ているんだ。

本当は約束をなんて守るつもり無かったんだけどね。

あの場での口約束で終わらすつもりだったんだけどさ、適当なところで撒こうかと思ってただけけど

でも、いいかもね。

あんたの女になるってのも。

守ってくれるんでしょう？あんたが。相手があの変態でも。

大蛇丸という縛りからあたしが解き放たれるかは分からない。でも肉体的な束縛はもうないのだ。

悔しいがこの男のなのかもしれない。

こいつがいなければあたしはあの男の影をいつまでも引きずっていったのかもしれない。

とりあえずは・・・

「ありがとう。」

日差しが差し込んだ中その笑顔はいままでのアンコの表情よりはるかに美しいものだったであろう。

「ん!?!」

「うわあああ!」

ここで空気も読まず起きる。そこらへんにいる鈍感主人公と一緒にしてもらっては困る。

「きゅ！急に起きるな！」

「朝っぱらからなんだよ・・・なんで？」

(聞かれてたら恥ずかしいでしょうがノノノ!!！)

「あ、そうそう約束は果たしてもらおうか。」

ゆらり。と立ち上がったカゲロウはアンコのほうに距離を詰める。

「今、朝なんだけど・・・」

「知らん、目の前にごちそうがあるのに食べないのはもったいない。」

距離を詰めてベッドの上に乗って来る。顔が近づき目が合う。

「ん!・・・んっ!」

強引に唇を奪う。アンコには抵抗するそぶりもないしする気もないように感じられる。

(・・・んっ)

「あ、そうそう最後の要求だが。」

「お前は勝手に死ぬなよ。たとえ目の前に大蛇丸がいても、お前はもう俺の女だからな。勝手に死ぬことなど許さん。」

「分かったわよ・・・」

・その後・

「アンコってベッドの中だと結構積極で「潜影蛇手!!」ぎゃああああああ!!」

・カゲロウ家・

「カゲロウさん今日はかえってこないんだって。」

伝令の蜻蛉から情報を受け取る白。

「そうなんですか?」

居候中のヒナタ。彼女の料理の腕はまだまだである。

「どうせまた女の人のところ行ってるんでしょう。」

「白ちゃんは先生のこと好きなの?」

「ええ。好きですよ。手は出してくれませんが。」

即答だ。いいなあうらやましい・・・私もこういつ風に気持ちを出せたらな・・・

「ヒナタちゃんも好きなんでしょう?」

「えっ!?!」

白の質問に意表を疲れたのか顔を真っ赤にして目を丸くするヒナタ。

「違うんですか？」

「いや！あのっ！その！」

（この気持ちが・・・好きってことなんだろうか・・・私が・・・  
先生のことを・・・）

第10話 「みたらし団子のタレは甘かった」 (後書き)

エロを直接的に描写せずに表現するって難しいですね。書いてると何か書いてるんだろ俺って気分になるのは内緒。

第11話 「NTR（寝取られ）じゃねえよNTR（寝取り）だよ」（前書き）

注意！

この話にはNTR（寝取り）要素が含まれます。

アスマ×紅のイメージを壊されたくない人はいますすぐ戻る推奨。

第11話 「NTR（寝取られ）じゃねえよNTR（寝取り）だよ」

白から聞いた話だが今年でアカデミーも卒業だそうだ。

え？何で俺が知らないのかって？職員会議とかほぼ寝てるからな・

・  
授業はちゃんとしてるよ？ちょっと女子を重点的に個人的に教えているだけであって決して卑猥なことをしているわけではない。

ちょっと覗きとかをしてるだけだから。

白の成績はそうとう良くてかなりの秀才だ。俺にだけ教えてくれたが血継限界も使えるようになったそうさ。

氷遁忍術だそうさ。夏に重宝しそうな忍術だな・・・

「よくやったな白！」

白の頭を撫でてやる。

「はい・・・／／／」

「僕もこの血の力をカゲロウさんのために使えることがうれしいです！」

無垢な、心の底から嬉しいという笑顔。

「お・・・おう・・・そうか。」

「あれカゲロウさん、どうしたんですか？」

さすがに赤くなって照れたとはいえん・・・

ヒナタにも一応幻術のイロハは叩き込んでおいた。あの子は日向のような柔拳やるようなスタイルにはむいてないように思うけどなあ、性格的にも。

医療忍者とかのほうに向いてるだろうに。名門に産まれてしまったがゆえか。

ヒナタは1週間に1度宗家の方に帰っている。さすがに預かりっぱなしはいけないだろうということだ。

恥ずかしがりな性格も若干ましになってきた。そりゃ衣食住一緒にしてればね。

「ヒナタ！一緒に風呂入るぞ！」

「え！ええ！？」

「大丈夫だって、お兄さんが優しく洗ったげるから。」

いや押しに弱いというかなんというか。その後、白にひっぱたかれただけ。

「ごめんくださいーい。」

宗家の人も顔なじみになった。

「あ、こんにちは。姉さまもご一緒ですか。」

迎えたのは日向ハナビ。8歳とは思えない振る舞いだ。

いやだがこの年齢だからこそその美しさがある……

かわいいし、我がハーレムには妹枠が足りないと思っていたところだ、ぜひそのポジションに

「カゲロウ殿か。」

いやしかしその場合この男をどうにかせねば俺の命がなくなってしまうだろう。

日向ヒアシ。

木の葉の名門日向家当主。厳格。

ヒナタのときは「跡継ぎはハナビだから」的なことってOKが出たんだが、ハナビとなるとそう簡単にはいくまい。

おそらくやりあつと2秒で死ぬだろう。俺が。

情報によるといろいろチートな技を使うらしい。近距離専門だから相性は良いが……どの道勝ち目ないしな。

だがハナビが手に入ればヒナタとともに漢の夢であるあのどんぶり  
が食べることができるのだ。

しかし今。屋敷と手だれに保護されているハナビに手をだすのは得

策ではないな。

白眼相手だと見つかつちやうしな俺。

いつかチャンスがくるはずだ・・・そのときこそ勝負のとき！

「どうもヒアシ様。」

一週間に一度あつていればそれなりに話す中にはなる。

「ヒナタのことは頼んだぞ。」

厳格なことには変わりないが。ヒナタのことを完全に切り捨てているあたり家族の情より一族の未来をとってるんだろくな。過去になんかあつたんだろくなね。

いつかこの男がヒナタと分かり合える日がくるのかね。

そういえば日向の分家に宗家を恨んでるといふネジだかペンチだかいうやつがいるみたいだが・・・

知ったこつちやないといえはそうなるな。俺の関わることじゃない。

そういえばハーレム候補で他にめぼしいのがないかと探っていたんだが、今年上忍になった夕日紅という美人がいた。

「木ノ葉一の幻術使い」とまでいわれるらしい、俺とどつちが上だろつか・・・

蜻蛉から気になる情報ももらった。

なんでも同じ上忍との関係が疑われるということだ。まだ本格的に進展してはいないだろうが将来的には危ない。だがしかし好意が他に向いてるのを変えるのも難しい。

だが。

だがしかし。

そんなことで我がハーレム計画を断念してはいけない。

他の男に好意を持っている女を横から搔っ攫う。つまりNTR（寝取り）。

燃えるではないか！

同じNTRでもNTR（寝取られ）ではないから注意な。

まあ少々、外道な方法を使うかもしれないがな。

となれば今回は入念な準備が必要だ。

早速お近づきになりますか。

「あれ？カゲロウさん休日なのにどっかいくんですか？」

いつつも寝てるくせに・・・とはいわないエプロン姿が似合う白が問いかけてくる。

うーむ、今度裸エプロンで出迎えを・・・

「出かけるんだっいたらお醤油かって帰ってきてください。ヒナたち  
ゃんは今日家に帰ってますから。」

「ん〜」

手を振りながら、わかつたわかつた意思表示をする。

情報によると家はこの辺か・・・いたいた。

へえ・・・こうしてみるとただの美人にしか見えないな。

紅は若い女性が着ているような服で花に水をやっているところだった。

「あの〜すいません。」

「あ、はい？」

そこにはいつもの忍者ではなく普通の女性の反応があった。

「夕日紅さんですよ。あ、どうもカゲロウといいます。」

明らかに怪しんでる。そうですね見知らぬ男が声かけてきたらね。

「アカデミーで幻術を教える教師なんです、木の葉一の幻術使  
いと呼ばれる紅さんを一度お目にかかれればと思ひまして。」

「え、ええ・・・ありがとうございます。」

ガードが固いな・・・一見クールな印象に見えるが。

「それとこれうちで作った地酒です。お口にあえばいいですが・・・」

情報によると酒好きらしい。意外だが。

「本当！？ありがとうございます。」

あ、ちよつと嬉しそう。

ただの酒じゃないけどね。もちろん。

「紅さんみたいなきれいな方が木の葉一の幻術使いだなんて思いま  
せんでしたよ。できたらお近づきになりたいですね。」

「いえ、そんな。」

返事はやはり当たり障りの無い形式的なもの。  
こりゃ思ったより難航するかもしれないな。

「で、あゝカゲロウじゃない！」

この声はアンコか・・・

「何してんのよこんなとこで！あら紅。はーん、私の次は紅をね」

( r y

ガシッ

アンの右腕を掴んで近くの路地裏まで連行する。

「ちよっ・・ちよ・・」

「・・・・あ・・・ッ」

「・・・ちよ・・そこは・・あっ・・」

「だ・・・あっ・・め・・」

その後路地から一人の男が飛び出して全力疾走で去っていった。

「ちよっ、アンの。いきなりどうしたの？」

一部始終を見ていたものの突然すぎていまいち理解できてない紅が  
アッコに問いかける。

「ハア・・・っ・・・ハア・・・な、なんでもないわよ!？」

「?でもなんか顔が赤いし、息も荒いわよ。服も乱れちゃってるし。」

「

「っ!?!」

アッコは顔をそらして背をむけるとスタスタと去っていった。

「・・・いきなり・・・あんなところで・・・」

なんだかぶつぶついつたけどいったいなんだったのかしら。

-その後-

「お醤油は？」

「すみません・・・」

第11話 「NTR（寝取られ）じゃねえよNTR（寝取り）だよ」（後書き）

検査結果が陰性だったので大学へ復学します。

そのごたごたで更新は遅くなります・・・

あと私はNTR好きなんですよね〜

あと神咒神威神楽の出来次第でも遅くなります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9438w/>

---

カゲロウ日記

2011年9月29日21時21分発行